論文

1939年にドイツから天皇に贈呈された美術作品について

安　松　みゆき

【概要】

本稿では日独間で戦前に行われた贈呈品について以前に検討した際に課題として残されていた問題をとりあげて考察する。それは1939年にヒトラーが昭和天皇に一対の《花瓶》を贈答していたことである。当時の日本の新聞ではベルリン王立磁器製作所の磁器と、その贈呈の史実の指摘以上のことは、これまで知られていなかった。

筆者は作品を所蔵する皇居三の丸尚蔵館のご協力を得て実見した。本稿ではその結果を報告し、これまで不明であった作品の全容を示したうえで、日独の新聞記事などの資料を参考にして、この贈呈に与えられていた政治的な意味を検討した。それによって、日独防共協定強化を反映したものであったことに加えて、日本側がドイツとのより密接な同盟関係を構築するための転換点を象徴する意味をもっていた可能性を指摘し、贈答品としての美術工芸品の役割を提示した。

【キーワード】

日独間の贈呈品　ベルリン王立磁器製作所、ヒトラーから天皇への贈答品、東郷茂徳、一対のクラテルの磁器花瓶

はじめに

戦前に美術作品は、鑑賞を目的とするだけでなく、他国との政治的な関係を強化する際に贈呈品として用いられることが多かった。これについては一部別稿でまとめているため[(1)]、ここではその際に課題となった事例をとりあげる。すなわち1939年にヒトラーが天皇に贈呈していたベルリン王立磁器製作所の一対の《花瓶》［図1］である。

それはいかなるものだったのか。当時の日本側の新聞では贈呈の史実を指摘したのみで、《花瓶》の形状をはじめ、その全体像が不明のままとなっており、さらに作品の現存の有無もわからずにいた。筆者はコロナ感染の対応が一段落ついたのでその調べをはじめ、まず関連する両国の新聞資料を入手し、つぎに作品が皇居三の丸尚蔵館に所蔵されていることを確認して、同館より作品を実見する機会を与えていただいた。今回は実見結果を報告し、そのうえで関連文献および資料を参考にしつつ改めて贈答品としての美術工芸品の役割を考察する。

これまでこの作品について、前述したように考察対象として論じたものは私見の限り見当たら

図１　ベルリン王立磁器製作所《花瓶》　皇居三の丸尚蔵館所蔵

ない。作品を製作したベルリン王立磁器製作所に関する研究は、ドイツでは重要な窯のひとつのために戦中の動向も含めてかなりすすめられているが、今回の作品をとりあげた研究はまだ認められない[(2)]。また日本でのベルリン王立磁器製作所についての研究には、バウハウスとの関係やナチスとの関係について指摘する論考もあるものの、本稿でとりあげる贈呈に注目するものはなく、全体としてはほぼ概説が多い[(3)]。そのなかで「将軍の贈り物」と題して明治初期のベルリン王立磁器製作所の作品をとりあげ、その特徴に迫った横浜美術館主任学芸員中村尚明氏の研究は、政治と磁器の関係から注目される。

このように限られた研究状況を踏まえて本稿の考察をすすめ、贈答品としての美術工芸品の役割を明らかにするとともに、歴史を明示する貴重な視覚的史料としてこの磁器に対する知見が、少しでも広まる一助となることが最終的な目的である。

１、日独両国の新聞報道での報告

1.1. 日本側の新聞報道

今回とりあげる《花瓶》を知るきっかけとなったのは、1939 年 2 月の『読売新聞』と『朝日新聞』の全国紙で紹介されていたことである。まずはそれら新聞記事を参考に確認すると、その報道は次のような内容で伝えられている。

1936 年 11 月 25 日に日本がドイツと防共協定を締結した。日本側ではそれを受けて日独の親善をすすめるために、1938 年の夏に天皇よりドイツ側のヒトラーに《蒔絵冠草一脚》を贈呈していた。それに対する返礼としてヒトラーが 1939 年 2 月に、天皇にベルリン王立磁器製作所の一対の《花瓶》を贈答した。《花瓶》は 2 月 22 日に駐日ドイツ大使館から宮内庁に届けられ、翌日の午前 10 時 10 分にドイツ大使オットが参内し、午前 10 時 30 分に鳳凰の間で天皇陛下に謁見して捧呈した。

このように、日本側の新聞の報道によると、ドイツ側からの一対の《花瓶》は防共協定締結のさらなる日独親交の進展を意図した日本側の贈呈に対する返礼であったことがわかる。

ドイツ側からの贈答のきっかけとなった日本側からの贈呈品《蒔絵冠草一脚》は、新聞に「見事な」と書かれていることから、日本の工芸の粋を示すものであったにちがいない。しかし残念ながら一脚を撮影した写真は掲載されておらず、現存についても確認はとれていないため、どのようなものであったのかは判然としない。とはいえ、ドイツ側は、その見事な日本側からの贈呈品を受けたことに対して贈答品を贈っているために、《花瓶》もかなり質の高いものとして選択されたはずである。当時の日本側の新聞には、一部に《花瓶》の写真が小さく掲載されたものがあるが、しかし印刷が悪く黒く潰れてしまっているために、作品の形状などは、ほとんどわからないままであった。

1,2, ドイツ側の新聞報道

ではドイツ側ではこのことをどのように報道していたのだろうか。それを確認したい。

今回調べた結果、関連する新聞記事は 1939 年 2 月 24 日に掲載された 17 件を数えた。その新聞はシュトゥットガルト、ライン・ルール地方、ヴェストファーレン、ハンブルク、ザクセン、ドレスデン、マールバッハーなどの限られた州立新聞や地方都市新聞に掲載されていたことがわかった。

その内容についてだが、ほぼ日本側の報道と同様のものであり、次のようにまとめられる。

日本の天皇が本日、駐日ドイツ大使オットより、総統からの贈り物としてのベルリン王立磁器製作所製の一対の《花瓶》を受け取った。それは、日独友好関係の印であり、また天皇、皇后そして国民の健康を願うものでもある。《花瓶》はシンケルのデザインによるもので、今回は新たに製作した。《花瓶》にはそれぞれブランデンブルク門とベルリンの首相官邸が手彩色され、金色の高貴な模様で飾られている。天皇は贈答品を受け取り、その《花瓶》の歴史と表現について説明を受けた。そして総統とドイツ国民の健勝を願った。

このように、昭和天皇へのヒトラーからの《花瓶》の贈呈は、日独友好関係の象徴として贈られているだけでなく、天皇皇后そして日本国民の健勝を祈るものでもあった。また、《花瓶》についての情報も新たにわかった。つまり、《花瓶》自体はドイツの新古典主義を代表する建築家で画家のカール・フリードリヒ・シンケル（Karl Friedrich Schinkel　1781-1841、以下シンケルと略記）によってデザインされた形を使って、今回新たに製作されていた。また手彩色で描かれていたのは、ブランデンブルク門と首相官邸であった。さらに金色で装飾がほどこされていることも確認できた。

2、天皇に贈呈された花瓶と実見結果

2.1. 現在の所蔵先とベルリン王立磁器製作所

今回、天皇への贈答品ということで、まず皇居三の丸尚蔵館での所蔵作品データで検索し同館に所蔵されていることを確認した。ただし、そのデータにも写真などの情報はなかった。そこで同館のご協力を得て作品を実見した。本稿ではその情報を報告することも合わせて目的としている。

ヒトラーが昭和天皇に贈答した一対の《花瓶》は 90 年近く経つものの、現在皇居三の丸尚蔵館に、当時のドイツ製の頑丈な箱に入れられて保管されてきている。皇居三の丸尚蔵館の 2023 年 3 月のホームページの情報では「台付花瓶」磁器一対、製作者は「ベルリン国立製陶所」、管理番号「SZK001159」と記載されている。

今回の《花瓶》の製作については、当時の日本側の新聞でも「ベルリン国立製陶所」として公にされている。この「ベルリン国立製陶所」の表記についてだが、ドイツ語では「königliche Porzellan Manufaktur in Berlin」と表記されるが、「KPM Berlin」と略語で紹介されることが一般的である。日本では、「ベルリン国立製陶所」や「王立磁器工房」あるいは「ベルリン王立磁器製作所」とも訳出されることがある [(4)]。本稿では原語に近い訳として後者の名前を用いて統一する。

この窯について簡単にその歴史を振り返ると、1751 年にプロイセン王国のフリードリヒ大王の特許を得て、全く陶器とは無関係の羊毛商 W. ヴェーゲラーが、ヘキスト窯の陶工を集めて開いたところから始まっているという [(5)]。美術史家前田正明氏によれば、その数年後に窯を閉じるものの、再びフリードリヒ大王が買収して王立磁器製作所になったとされる [(6)]。大王はマイセンから美術家をベルリンに招いて、マイセンとセーヴル様式を併せたベルリン独自の様式を生み出したという [(7)]。

さて、前述したように 2024 年 8 月上旬に皇居三の丸尚蔵館で、《花瓶》を実見することができた。それによって新たにわかったことを以下に記載する。

2.2. 形状について

まず、《花瓶》の形だが、ドイツ側の新聞でも指摘されているように新古典主義の建築家・画家のシンケルがデザインしたものだが、それは「メディチ家の花瓶」からくる「大型のクラテル花瓶」と称されるものともいえる。そのためこの形がはじめて成形されたのは 1830 年頃と見なすことができる。クラテルとは、ギリシャ時代の陶器で、その一般的な器形は高い脚台のある胴部と 2 つの取手からなり、ワインと水を混ぜるために使われたり、墓石に使われるという [(8)]。今回の対象となるのは、そうした歴史を持つもので、大きさは高さ 44.0cm、直径 31.5cm。皇居三の丸尚蔵館学芸部岡本隆志氏によれば、上部の胴体と、それを支える脚台の部分がネジで接続されており、内部では水を実際に張ることを想定しているためか、ネジの部分が見えないように

図 2　《花瓶》胴体正面ブランデンブルク門

図 3　《花瓶》背面

蓋をしたうえで焼き付けられているという。

本体胴体正面には、風景画が描かれており［図 2］、「風景画の花瓶」といわれるものでもある [9]。風景画は淡い色彩でまとめられている。背面の胴体には、ナチスの国章である両翼を広げて鉤十字を掴む鷲「ライヒスアードラー（帝国の鷲：Reichsadler）」が大きく金色で描かれている［図 3］。花瓶の広口の部分と、胴体部分の接合部や取手などに金色の線が施されている。また脚台に接する花瓶の円形の側面に金色が塗られている。全体の白地に対して金色の使用も限られ、風景画以外に装飾がないために、淡い色彩の風景画が強調され、落ち着いた印象を与えている。

2.3. 絵付け師

対となった花瓶の各風景画の右側には、「W.Papenfuß」とその名前の下に「1938」とある。名前の最後が読みづらく、皇居三の丸尚蔵館学芸部細川晋太郎氏に助言をいただいて特定にいたった。おそらく手彩色した絵付の担当者の名前と制作年と思われる。

「W.Papenfuß」という人物だが、陶磁器を扱うドイツの古美術店などで公表されている資料によれば、この人物は「ヴィリー・パーペンフース : Willy Papenfuß」と表記されるドイツの磁器の絵付け師で、出身地は不詳だが生没年は 1878 年から 1954 年。76 年の生涯において彼の絵付け師としての活躍は 1905 年から亡くなる 1 年前の 1953 年までの 48 年間に及ぶとされる [10]。ベルリン王立磁器製作所の花の絵付けでは最初の世代に分類されている。ドイツで出版されている『ザウル一般芸術家事典　*Saur Allgemeines Künstlerlexikon*』[11] は中世から近代までの西洋を中心とする芸術家や美術史家を一部アジアまで幅広くとりあげて基本情報を詳細に網羅しているが、残念ながらパーペンフースはそこには掲載されていない。またティム･D･グローネルト（Tim D. Grohnert）によって、ベルリン王立磁器製作所の 1918 年から戦中も含めた 1988 年までの 70 年間について『KPM ベルリンの磁器　1918-1988　*Porzellan der KPM Berlin*』として三巻でま

とめられた大著があるが[12]、そこにわずかだが、パーペンフースは花の絵付け師として、また作品としては戦後1950年のリアルなカエルを描いた花瓶が紹介されている[13]。しかしグローネルトの同書三巻の、ベルリン王立磁器製作所に70年の間に関係した65名の芸術家の生涯の項目には、パーペンフースはとりあげられておらず、現在では評価外の対象となっている。当然のこととして、今回の昭和天皇への贈答品となった花瓶も出てこない。

そのなかで、パーペンフースの戦後に言及したものがある。『磁器事典　*Porzellanlexikon*』（電子データ）には、戦後にベルリン磁器製作所の置かれたバイエルン州北東部の磁器製作の場として知られるゼルブ Selb でも[14] 1949年に活躍したことが指摘されており、ドイツの磁器の世界では一応認められていたことがわかる。

このように今回の《花瓶》に絵付けをしたのは「ヴィリー・パーペンフース」であり、戦後に活躍していたことはドイツの磁器世界では知られていた人物である。とはいえ、戦前についての活動については断片的な指摘にとどまっており、グローネルトの対応に象徴されるように、現在では評価外の対象になっているといえる。

2.4. 図柄

花瓶の胴体部分にはそれぞれ異なる風景画が遠近法を使って写実的に描かれている。ひとつには正面から見たブランデンブルク門が描かれている［図2］。光は奥から手前に差し込んでおり、その効果を受けて、ブランデンブルク門の中央の柱間から、遠くに円筒形の戦勝記念塔が光のなかに神々しく見えている。背景となる空はグラデーションによって全体の風景に優美さと落ち着きを与えている。

図4 《花瓶》胴体正面ベルリンの旧首相官邸

もう一瓶の図柄は、1731年に造られた旧首相官邸のラジヴィウ宮殿（Palais Radziwill）を写実的に描いたものである［図4］。日本側の新聞には情報はないが、ドイツ側の新聞には首相官邸（総統官邸）として明示されている。正面ファサードには大きな破風の下に、2階から3階を突き抜ける2本毎の角柱付け柱で飾られたバロック様式の宮殿である。コの字型の宮殿を中央に据えて、手前には街路に沿って敷地を区分する柵が描かれている。光は左側から右側奥へと差し込んでおり、建物の屋根の上の空には、ブランデンブルク門の空と同様に、薄いグラデーションによる空を表現し、宮殿に品格を与えている。

中心に位置する建物の上部にはナチスの国旗が旗めいており、それによってこの建物が、ナチ

スの政治的な建造物であることがわかるような演出である。ビスマルク以来首相官邸となっていた建物であり、ヒトラーのときにも実際に活用していた旧総統官邸の建物でもあった。

ラジヴィウ宮殿は1739年に造られたもので、もともとはポーランド・リトアニア共和国の貴族で、1818年から48年までプロイセン領となった自治地域ポズナン大公国の総督アントニ・ヘンリク・ラジヴィウが住んでいたという。1878年に初代ドイツの首相ビスマルクがドイツ国首相宮殿として使用し、その後首相官邸となっていった[(15)]。実はこのラジヴィウ宮殿は、ベルリン王立磁器製作所ではこれ以前からクラテルの花瓶にベルリンの名所として描かれてきた図柄のひとつであった[(16)]。ベルリンの眺望は、初期ビーダーマイアー時代のベルリンを堪能できるものとして見なされている[(17)]。

ヒトラーは、同じ敷地内に建築家アルベルト・シュペーア（Albert F. Speer　1905-1981、以下シュペーアと略記）による新しい建物を建設しており、まもなく完成することになっていた[(18)]。ヒトラーのベルリンの総統官邸といえば、こちらのシュペーアの建物を指すほど、ベルリンのナチスの建築物を象徴するものとなる。ヒトラーはその後、旧ラジヴィウ宮殿の前庭からシュペーアの総統官邸までの地下に、巨大な地下壕を造らせた。その地下壕はヒトラー最後の場となり、旧ラジヴィウ宮殿は敗戦後現存しない[(19)]。

2.5. 職人の記号と製作年

《花瓶》の製作年代は、花瓶の1938の記載とともに天皇への贈呈のやり取りが1939年2月末のため、製作されたのは搬送期間も含むとおそくとも1938年12月以前になる。岡本隆志氏は花瓶内側に残されたエンボスのよる記号があることを指摘され、それが製作年を示すことを教示くださった。岡本氏の指摘によると、旧総統官邸を描いた花瓶の台座内側には「ν」の文字が、一方のブランデンブルク門の花瓶の台座内側には「μ」の文字が刻まれているため、その文字から前者が1938年の作品となり、後者は1937年の製作となるという。ただし岡本氏は、その年代は花瓶の完成とは限らず、成形を示す年ではないかとも想定されている。ドイツ側の新聞には、天皇のために新しく製作されたことや、手彩色であることが書かれている[(20)]。これらを勘案すると、一対の作品として贈呈された花瓶だったが、成形が事前になされていた作品である可能性や、また一対であっても必ずしも2個が同じ時期につくられるとは限らないこと、そして新しく製作するという意味が、手彩色されたことになる可能性が、今回の調べによって把握できる。

3　作品に隠された政治性

3.1. なぜベルリン王立磁器製作所の作品なのか

この作品について新聞記事に加えて実見調査によって基本的なデータが明らかになった。しかしこの時期の贈呈は、文字通りの意味だけがあったわけでない。すでに前述したように、プロパガンダの役割を持ち、政治的な結びつきを想定しなければならない。

そこで筆者の疑問からその点を検討したい。それは、ヒトラーは天皇に対する返礼としてベルリン王立磁器製作所の花瓶を選んだのはなぜか、という疑問と、同時代の同じ成形によると思われる作品と比較すると、天皇に贈呈した作品に簡素な印象が強いのはなぜかという疑問である。

最初の疑問だが、今回の贈答品として、クラテルの風景画を描いた花瓶を必要とするのならば、ドイツで最も磁器の歴史の古いマイセンにも類似した花瓶があることは見逃せない。マイセンは日本からの影響を受けた柿右衛門風でも知られていて、日本との歴史的なつながりを持つことから、マイセンの花瓶も選択肢に入れてよいだろう。しかし、ヒトラーはベルリン王立磁器製作所の作品を選んだのである。なぜマイセンでなく、ベルリン磁器製作所の作品だったのだろうか。

その理由として2つ想定されることがある。ひとつは、マイセン側の問題である。ヒトラーは『わが闘争』のなかで、日本が文化を創造することができず、あくまでもアーリア人のもとで維持できる人種にすぎないとして、一貫して日本を評価していなかったことである[21]。マイセンを選ぶと、日本の文化を受け入れてドイツの文化が造られた一面を示すことになってしまい、ヒトラーの持論と矛盾することになる。そのためマイセンを選択することはヒトラーにはありえなかったのではないかと考えられる。

ベルリン王立磁器製作所の作品を選んだもうひとつの理由として、江戸末に将軍に贈られた贈り物がKPMの磁器を献上した経験を援用した可能性が想定される。つまりベルリン磁器製作所がプロイセン王国に由来してドイツ帝国を象徴する意味を持っていたということである。将軍の贈り物については前述した横浜美術館主任学芸員の中村尚明氏の研究が詳しい。中村氏によれば、徳川幕府とプロイセン王国の間に修好条約を締結するためにオイレンブルク伯爵が日本を訪れた際に、将軍徳川家茂に贈呈した贈り物が、ベルリン王立磁器製作所で製作したリトファニーであったという[22]。さらにフリードリヒ大王はヒトラーが尊敬する人物であり、その大王直属の製陶所でもあることが、窯の選択の要因のひとつになったのかもしれない。

このような理由から、ヒトラーは、その経験を参考にしてベルリン王立磁器製作所の作品を選んだと推測されるのである。

3.2. なぜ花瓶のデザインは簡素なのか

つぎに、もうひとつの疑問についてだが、天皇に贈呈したものと同じ型から成形され、天皇の花瓶の2年後の1941年に製作された別の一対の花瓶があるので［図5］[23]、それと比較して考えたい。特に片方の花瓶の風景画は、天皇への花瓶と同じ構図によるブランデンブルク門である。

この1941年の作品と、1939年の天皇の花瓶とを比較するならば、上記したように花瓶の胴体部分には両者ともにブランデンブルク門の風景画が描かれており、その構図などもほぼ同じものと見なせる一方で　大きく異なるのは、1941年のほうが模様や金色を施している部分が多いことである。たとえば上の口径と足元に1941年の花瓶にはかなり大きめの葡萄の葉のような文様が一周して描かれている。1939年の天皇の花瓶にはそれはない。また正方形の台座の厚みの部

分には、天皇の花瓶では認められないが、1941年の花瓶には金色が塗られている。取手の部分では、天皇の花瓶では金色の線が描かれているのに対して、1941年の花瓶では、取手のすべてが金色に塗られている。

図5　オークションに出品された1941年の《花瓶》（ベルリン王立磁器製作所）

また両者の共通する点としては、一対の花瓶であることと、また風景画の選択において、ベルリンの名所を描くにしても、ブランデンブルク門と宮殿の組み合わせ方法がとられていることである。1941年の花瓶の風景画には、ブランデンブルク門とサンスーシ宮殿が描かれている。1939年の天皇の花瓶もブランデンブルク門と総統官邸になった旧ラジヴィウ宮殿をとりあげている。

さらに背面のデザインについてだが、1941年の花瓶では、葡萄の葉の円環が描かれているのに対して、天皇の花瓶はナチスの象徴となる帝国鷲が認められる。たしかに円環と帝国鷲と描かれた対象は大きく異なっている。とはいえ、これもひとつの印のデザインとして見るならば、表に風景画を、裏には印のようなものを描いている点では、共通する方法がとられているともいえる[24]。

このように天皇への花瓶を1941年の花瓶と比較すると、興味深い符合を示す一方で、異なる特徴が際立っていることも見逃せない。ここで特に大きな関心を示しているといえるのが、両者の違いであり、意外にも1941年の花瓶には金色の装飾が描かれて、彩色された面や取手などから、天皇への花瓶よりも豪華な印象を受けることである。

では、天皇への花瓶は、なぜ豪華な仕上がりになっていないのだろうか。それについてドイツ側の新聞にそのヒントが見出せる。すでに指摘していることだが、ドイツ側の新聞にもこの贈呈について報道されており、それらの記事によると、天皇に贈呈される花瓶は、贈呈のために新しく製作されたと伝えているのである[25]。つまり、あえて装飾を排除して、豪華さを抑えて簡素なデザインとしたのは、日本の皇室の美的趣向、ひいては日本の美的趣向を想定したものではないかと考えられる。

そのことを裏付けるひとつとして、たとえば、ドイツ側の日本の陶器に関する把握を確認することができる。ドイツの東洋美術史家で日本美術史家オットー・キュンメル（Otto Kümmel 1974-1952）は1922年に『日本美術工芸史　*Das Kunstgewerbe in Japan*』を表したが、そのなかで、日本の陶器は茶道にかかわる侘び寂びの茶碗を中心にして紹介されているので[26]、日本の陶器が装飾の抑えられた作品として理解する印象が残る。また陶器ではないが、建築家ブルーノ・タウト（Bruno Taut　1888-1938）は1932年に来日した際に、宮家の桂離宮を見て、その簡素な美

を賞賛して翌年にそのことを書物にまとめている。特に日本の建築界では、近代建築の目指す合理性・機能性・即物性のあることを桂離宮から発見し、それらが天皇芸術と呼んだことを高く評価している[27]。

ただしナチス時代を代表するベルリン王立磁器製作所の立場からすれば、抽象化やバウハウスを批判したナチスの芸術観を反映するために、そのままタウトの日本観を受け入れたとは思えないのが通常の判断である。しかしすでに指摘されてきていることだが、ベルリン王立磁器製作所がナチスの否定したバウハウスの「即物性」からの影響を受けていたことが知られているため、タウトの桂離宮に象徴される新たな日本の美についても、ベルリン王立磁器製作所で受容することがあり得るのである。また1938年になると、日本側の日本美術史のなかにも桂離宮の簡素さなどが加えられていく[28]。そのころにはドイツも日本文化の理解に努め、1939年のベルリンでの「日本古美術展覧会」を準備していた[29]。こうした状況を勘案するならば、天皇への《花瓶》が、他の花瓶に比べて装飾が抑制されて、簡素で落ち着いた印象を与えるのは、ドイツ側の日本文化の理解を反映したものといえるのではないだろうか。

3.3. 贈呈品が意味すること　ドイツ側の事情

では、日本文化を反映させた《花瓶》がいかなる意味を持ち得るのかといえば、ドイツ側ではナチスのプロパガンダの役割を担ったことが推定される。ちょうどヒトラーが天皇に贈答品を贈った1939年2月22日、23日は、日本から搬出した日本美術作品をベルリンで展示した「日本古美術展覧会」を開催する数日前にあたる。つまり、すでに別稿に指摘しているように「日本古美術展覧会」は長年のドイツの日本美術史家たちの願いであった、日本に所蔵される優品を展示したものだが、それ以上に翌年に展開する日独伊三国同盟への布石となるようにドイツ国民に日本とのつながりを強固にする政治的な重要な行事としても捉えられていた[30]。今回の天皇への贈呈も、個人的な天皇への尊敬の念などと報道されている面もあるが、それはあくまでも表向きのことであって、同時期開催の「日本古美術展覧会」を後押しするものであり、本来の目的は日独の同盟の役割が大きかったと考えられる。

さらに、今回の《花瓶》は、贈呈交流あるいは美術交流の立場からすれば、両国にとって、大きな意味を持つことも指摘したい。というのは従来、ドイツ側が日本の美術や文化に対して低く評価していたこともあってか、ドイツ側からは芸術を政治的に盛り込むほど重視していたのとは裏腹に、日本に対しては質の高い美術品の贈呈はほとんどなかったからである[31]。しかし今回の天皇への贈答品は、ドイツの伝統を誇るベルリン王立磁器製作所の作品であった。しかも、美術工芸品は、ドイツの新古典主義を代表するシンケルによるものと指摘されていた。そのため、ドイツ側からすると最も質の高い美術工芸品をようやく天皇に贈呈したと把握し得るのである。その点でも、このベルリン王立磁器製作所の一対の《花瓶》は大変貴重な作品ということができるだろう。

3.4. 贈呈品が意味すること　日本側の事情

ところが、この贈呈のやり取りには、実は日本側にとって公にできないドイツ側への特別の配慮があった。日本側の隠された事情について最後に述べる。

今回のヒトラーから昭和天皇への贈呈のきっかけは、日本側からはじまり、防共協定締結を受けて日独友好関係構築のためであった。そのように日独双方の新聞において報道されていた。そこで今回の贈答のきっかけとなった、日本側がドイツ側に美術工芸品を贈呈した記事を探したが、不思議なことに日本側には認められず、ドイツ側の新聞では7件の記事を見つけることができた[32]。

それら記事において意外だったのは、日本側の当時の駐独日本大使東郷茂徳が離任する機に、今後の日独関係の象徴として日本の天皇からの贈呈品がヒトラーに贈られたと書かれていたことである。つまり、今回の記事のタイトルには1誌を除き、東郷の名前が記載されているのである。具体的な記事の内容は、各新聞社に配信していた記事の元となる「ドイツ通信社　Deutsches Nachrichtenbüro」の記事を参考にすると、次のように要約することができる。

東郷茂徳は、自ら任務から離れることと、個人的に天皇からヒトラーに日本の工芸品を贈呈することを、南ドイツのベルヒテスガーデンの別荘ベルクホフにいたヒトラーに直接知らせた。贈呈品は3点の芸術的に優れた日本の工芸品で、Kwantaku　Koro香炉　Kobako小箱であり、東郷茂徳は、贈呈品が今後の友好なる日独関係の象徴であることを強調して伝えていたという。ヒトラーはこの贈呈に対して天皇と日本国民の健康を祈り、心より感謝の念を述べて、東郷茂徳に自筆のサインの入った写真を贈ったとされる。

この要約からわかるように、贈呈のきっかけは、東郷が駐独日本大使の任務から離れることに関係していた。

ところが、さらに東郷の動向を調べると、東郷が駐独日本大使を退くのは、任期によるものでなく、更迭されてのことだった。東郷については多くの文献が出ており、たとえば、東郷自らがまとめた『時代の一面、東郷茂徳　大戦外交』と『時代の一面、東郷茂徳　大戦外交の手記』の孫の東郷茂彦の解説によると、東郷は、東京大学でドイツ文学を学び、ドイツ語に精通していたが、韓国出自であることによって幼いころから差別を経験していた[33]。また東郷茂徳に関するウィキペディアでは妻はユダヤ系のドイツ人と書かれている[34]。

いずれにせよ東郷は戦争を回避するには、米英との関係を望んでいた。当時それを知っていた政府の親独派にとって同派の陸軍の大島浩の助言を受けて、東郷を邪魔な存在とする見方につながり、東郷は更迭されてロシア大使の任務に変更されたという。東郷の手記に掲載された当時の大使館の商務書記官の口述書などによると、東郷のあとに駐独大使になる大島浩は、東郷の親英的立場により、日独間の動きも鈍いことを問題視して、東郷の立場の切り崩しを行っていたとい

う[35]。

また東郷の手記には、ヒトラーに自らの離任を報告したことが書かれている。そこでは、天皇からの贈呈品を渡し、ヒトラーはそれを大変喜んでいたこと、また東郷の任期が短く、ロシアに移動することを残念がっていたことが書きとめられていた。さらに東郷は、ドイツの今後の他国との動きにおいて、平和を維持するためにイギリスとの関係がどうなるのかをヒトラーに質問し、ヒトラーは、ドイツ側の考えに対してイギリスが従えば平和は維持される、と答えたという[36]。ただし、この東郷のヒトラーへの質問については、ドイツ側の新聞でも報道されていなかった。

このように親英派がいるなかで、日本側の親独派が、今後の動向の根幹をなす問題に対して、強引ともいえるやり方で東郷を処遇したことを考えると、東郷の更迭を公にすることは、日独関係に歪みをもたらすことになるため、隠蔽されるべき事案になったといえる。

それを裏付けるように、ドイツ側の新聞には、贈呈に際して東郷の言葉として、今後の日独友好関係のための贈呈であるという目的をヒトラーに伝えた、と報道されていた。その一方で前述した、英国に関する東郷とヒトラーのやりとりについては、全く触れられていなかった。

そのため、天皇からの贈呈は、東郷の更迭によって、日本側の大島浩の親独派が、親英派をおさえて、日本がドイツと連盟を組むことになる決定的な転換点を示すものだったということができる。

以上のように、ヒトラーから贈答された一対の《花瓶》は、表立っては日独友好を意味するものだが、しかし、実は日本側の親独派において同盟関係をドイツと結ぶために画策していた事情を隠す天皇からの贈呈への返礼品であった。すなわち、第二次世界大戦につながる同盟関係の構築という意味で、歴史的な転換点を示すのが、今回の一対の《花瓶》であったと指摘できるだろう。

おわりに

戦前にヒトラーが昭和天皇に贈答した一対の《花瓶》について、当時の新聞ではベルリン王立磁器製作所の磁器と、その贈呈の史実の指摘以上のものは、これまで知られていなかった。筆者は、作品の所蔵先である皇居三の丸尚蔵館にご協力を得て実見した。本稿では、その結果を報告し、これまで不明であった作品の全容を示したうえで、この贈答に与えられていた政治的な意味を検討した。

それによって、ドイツ側の事情としては、日本から日独防共協定の締結を、さらなる友好関係に進展させるための贈呈を受けて、それに応えるためのプロパガンダのひとつとして、優れた工芸品を日本側に贈答したことが理解された。また花瓶のデザインはこれまでになく簡素であったが、それは日本の天皇の簡素な美の趣向などに応えたものである可能性を指摘した。

さらに見落としてはならないのは、この贈答のはじまりは日本側からヒトラーへの贈呈によるものだったが、それはたしかに日独防共協定強化を反映したものであった。ただし、その説明では足りない状況も存在していた。つまり、日本側がドイツとのより密接な同盟関係を構築する上

で、これに批判的であった当時の駐独日本大使東郷茂徳を更迭して、大島浩に変更する選択を行ったことと結びついていたのである。当時の資料によると、それは大島の画策が強く働いていたとされる。

そのような危うい事実をドイツ側に把握されることのないように、日本側は、東郷の離任とともに、天皇が個人的にヒトラーに贈呈することによってカモフラージュしたと推察された。

このようにこの時代の動向は、一見文化的な動きとして報道されているので、真意の理解に到達できないことが多い。それがこの時代の美術の持つ危うさを示している。

謝辞

皇居三の丸尚蔵館学芸部細川晋一郎氏、同主任研究員岡本隆志氏、同館総務課、文化庁速水香奈氏には調査及び写真掲載にあたり格別のご尽力を賜りました。心から感謝申し上げます。

写真典拠

図１～４ … 皇居三の丸尚蔵館所蔵

図５ … Sabet Antiquität Berlin　https://sabet-antik-berlin.de

欧文タイトル

Zu den Kunstwerken, die dem Kaiser 1939 von Deutschland geschenkt wurden

Miyuki YASUMATSU

欧文要旨

In diesem Artikel wird ein Thema erörtert, das in früheren Studien zu den Vorkriegsgeschenken zwischen Japan und Deutschland nicht behandelt wurde. Es handelt sich um die Tatsache, dass Hitler 1939 Kaiser Showa ein Paar „Vasen“ als Geschenk überreichte. In den damaligen Zeitungen wurde bisher lediglich auf das Porzellan aus der Königlichen Porzellan-Manufaktur Berlin und die historischen Fakten der Übergabe hingewiesen. Der Autor führte in Zusammenarbeit mit dem San-no-Maru Shozo-kan (museum) des Kaiserpalastes, in dem das Werk aufbewahrt wird, eine Untersuchung durch. Der vorliegende Beitrag berichtet über die Ergebnisse der Studie, die den vollen Umfang des Werkes aufzeigt, der bisher unklar war, und untersucht die politische Bedeutung, die dem Geschenk beigemessen wurde, unter Bezugnahme auf japanische und deutsche Zeitungsartikel und andere Quellen. Es wird aufgezeigt, dass das Geschenk nicht nur die Stärkung des deutsch-japanischen Antikominternabkommens widerspiegeln, sondern auch einen Wendepunkt in den Bemühungen der japanischen Seite um ein engeres Bündnis mit

Deutschland symbolisieren sollte, und die Rolle des Kunstwerks als Geschenk dargestellt.

［註］

（１） 安松みゆき「ヒトラーへの贈り物・ヒトラーからの贈り物―いびつな美術交流の様相―」増野恵子他編『もやもや日本近代美術　境界を揺るがす視覚イメージ』勉誠社、2022 年、119-146 頁。

（２） たとえば、Plötz-Peters Hannelore : Porzellan der KPM Berlin für polnisch-preussischen Fürsten Radziwill, in: *Keramos*, Heft 246, Jg. 2019, S.35-34. Tim. D. Gronert : *Porzellan der KPM Berlin 1918-1988*, 3 Bände, Berlin 2020. また、磁器と政治の関係をとりあげた研究があり注目できる。ただしそれはナチス時代に活躍した一人の作家をとりあげたものであり、残念ながら今回の考察に関する論究はなかった。Christia Lechelt : *Porzellan und Politik, Der Tafelaufsatz "Geburt der Schönheit" von Paul Scheurich*, Berlin 2011.

（３） 以下がある。長井千春、宮崎清「第一次大戦後におけるドイツ磁器産業の再生とデザインの展開　―日本とドイツの陶磁器産業とデザインに関する研究（3）―」『デザイン学研究』Vol. 54, Nr. 3、2007 年、85-94 頁。

（４）「王立磁器工房」の訳は、ヤン・ディヴィシュ『ヨーロッパの磁器』岩崎美術社、1988 年、60-61、209-210 頁。「ベルリン王立磁器製作所」の訳出を用いているのは以下の文献。前田正明『西洋やきものの世界　―誕生から現代まで―』平凡社、1999 年、189-191 頁。『国立マイセン磁器美術館所蔵マイセン磁器の 300 年』展覧会図録 2011 年、サントリー美術館、年譜　186 頁。中村尚明「将軍への贈り物―徳川記念財団所蔵のプロイセン王立磁器製作所（KPM）製リトファニーについて」日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂、2013 年、18-30 頁。現在作品を所蔵する皇居三の丸尚蔵館では、当時の名称「ベルリン国立製陶所」としている。皇居三の丸尚蔵館のホームページを参照のこと。https://shozokan.nich.go.jp/collection/?at=detail&id=1159&rec_no=46&artpic_id=&ated=search「ベルリンの磁器工場」は『ギュンター・ラインヘッケル編集『西洋陶磁大観』第 8 巻ドイツ･オーストリア陶磁（翻訳監修新規矩男）20 頁による。ドイツが東西に分裂していたときには「KPM ロイヤル」などとも呼ばれていた。『ヨーロッパ名窯図鑑　―流窯食器を楽しむ』講談社、1988 年、49 頁。

（５） 前田正明前掲書、189-191 頁。

（６） 前田正明前掲書、189-191 頁。

（７） 前田正明前掲書、189-191 頁。岡田衛編集『世界陶磁全集 22　世界（三）』小学館、1982 年、221 頁。

（８）『世界美術大事典 2』小学館、1989、159 頁。器形については以下も参照。澤柳大五郎『ギリシャの美術』岩波新書、1972 年、257 頁。

（９） ベルリン州立美術館のサイトで指摘されている。Smb.museum

（10） https://sammlung-online.stadtmuseum.de　オークションのサイトは以下を参照　https://drouot.com/en/l/23302803-rare-souvenir-or-wedding-cup-with-portrait-painting-of-willyaleph.pg.de

（11） De Gruyter: *Saur Allgemeines Künstlerlexikon*, Bd.94. München / Leipzig, 2017.

（12） Tim D. Gronert : *Porzellan der KPM Berlin 1918-1943*, Band I, Band II, Band III, Berlin 2020, Tim D. Gronert, a.a.O., Bd I, S.15. Tim D. Gronert, a.a.O., Band I, 2020, S.15 und 152.

（13） Tim D. Gronert, a.a.O., Band II, S.62.

（14） Porzellanlexikon.de.　セルブは KPM の疎開先だったという。

（15） https://ja.wikipedia.org/wiki/ 総統官邸

（16） Wolfgang Scheffler : *Berlin im Porzellanbild seiner Manufaktur*, Berlin 1963, S.18.

（17） Wolfgang Scheffler, a.a.O., S.18.

（18） Maik Kopleck：*Berlin 1933-1945*, Berlin 2005, S.11.

（19） Maik Kopleck, a.a.O., S.11-15.

（20） たとえば、次の新聞を参照。*Stuttgarter NS-Kurier* : Gauorgan der NSDAP : Stuttgarter neues Tagblatt Freitag 24.02.1939. なお花瓶内部には KPM ベルリンの王笏のマーク（コバルトブルー）と帝国宝珠絵付けマーク（赤色）がある。岡本氏の助言で確認した。

（21） ヒトラーは世界の順守を「文化創造者」「文化保持者」「文化は会社」という 3 つのカテゴリーに分類し、それに対してアーリア人、日本人、ユダヤ人を例にあてはめた。日本人がその典型とされた文化保持者とは、アーリア人の影響下においてのみ文化や科学・技術を維持し、その影響を失うと衰退に陥る人種であり、創造性に欠けると見なされていた。アドルフ・ヒトラー『わが闘争』上、（平野一郎・将積茂訳）角川書店、413 頁。なおヒトラーと日本美術への評価に関しては拙書を参照。安松みゆき『ナチスドイツと＜帝国＞』日本美術　歴史から消された展覧会』吉川弘文館、2016 年。

（22） 中村尚明「将軍への贈り物―徳川記念財団所蔵のプロイセン王立磁器製作所（KPM）製リトファニーについて」日独交流史編集委員会編『日独交流 150 年の軌跡』雄松堂、2013 年、18-30 頁。

（23） ベルリンのサーベット骨董店のホームページのサイトに 2024 年 8 月 6 日に出品されていたが、10 月 11 日には売却されたのか、削除されている。Sabet Antiquität Berlin　https://sabet-antik-berlin.de　また「Kratervase（クラテル型花瓶）KPM Berlin」とインターネットで検索すると、その大半は彩色され、風景画の描かれた装飾的な作例が抽出されるので、それも参照してほしい。

（24） 他にも 1851 年頃にフリードリヒ・ヴィルヘルム 4 世の Friedrich Wilhelm IV の妹アレクサンドリーネ Alexandrine に贈呈された花瓶をインターネットで見出した。風景画が描かれていることは側面からの写真一枚のために一部しか理解できない。そのような部分的な情報ではあるものの、このアレクサンドリーネの花瓶と天皇への花瓶を比較すると、どちらも胴体部分に風景画が描かれており、その風景のテーマに違いがあることはすぐに理解できるが、それ以上に、胴体部分や脚台にも金色の装飾が認められ、豪華な印象を与えているところに天皇への《花瓶》との大きな違いがある。https://veryimportantlot.com/en/news/blog/kpm-berlin--what-where-when

（25） 例えば、以下を参照。Stuttgarter NS-Kurier : Gauorgan der NSDAP : Stuttgarter neues Tagblatt Freitag 24.02.1939

（26） Otto Kümmel : *Das Kunstgewerbe in Japan*, Berlin 1922, S.101-145. なお書物のタイトルを日本語に訳出すると「日本の工芸」となるが、ドイツ語の書籍の表紙には日本語で日本工芸史と右側から左に読む形式で書かれているので、それを本文でも重視して選択している。

（27） 宮元健次『桂離宮　ブルーノ・タウトは証言する』鹿島出版会、1995 年、37、136、140 頁。

（28） 帝室博物館『日本美術略史』1938 年、250、251 頁。図版 131 頁。

（29） 安松みゆき前掲書を参照のこと。

（30） 安松みゆき前掲書を参照のこと。

（31） 安松みゆき前掲論文、119-146 頁。

（32） ベルリンの新聞を探すことはできなかった。ただし、ナチスの報道元となるドイツ通信社の記事は見つけられ、

今回の新聞の大半はそれをほぼ繰り返していることがわかった。該当した新聞は地域的にはハンブルクやシュトゥットガルトなどドイツの西側の新聞に偏っていた。この地域的な報道が何を意味するのかは、今後の課題にしたい。

（33） 東郷茂徳『時代の一面　東郷茂徳　大戦外交の手記』中公文庫、2021 年、529-531 頁。以下、東郷茂徳 2021 と略記。近代日本人の肖像（電子データ）国会図書館 ndl.go.jp.『向学新聞』NPO 法人国際留学生協会によれば、韓国出自によって当初結婚を考えていた女性と結婚が破棄という経験をしていたという。http://www.ifsa.jp/index.php?togoshigenori

（34） エディ・ド・ラランドと 1922 年に結婚しているが、彼女がユダヤ系ドイツ人だったとする指摘は次を参考のこと。https://ja.wikipedia.org/wiki/ 東郷茂徳

（35） 東郷茂徳『時代の一面　―東郷茂徳外交手記―　外相東郷茂徳（I）』原書房、1985 年、122、125、127 頁。以下東郷茂徳 1985 と略記。東郷茂徳 2021、174、175、182-184、190、191 頁。

（36） 東郷茂徳 1985、132、133 頁。東郷茂徳 2021、190、191 頁。